

令和6(2024)年度 四日市大学 研究テーマ一覧

<原文ママ>

(学部別・五十音順・敬称略)

学部	連番	氏名	研究テーマ	概要
総合	1	浅井 雅	地域社会における「学問」受容 —18世紀武家社会を中心として—	日本において近世は、あらゆる階層が初めて「教育」を受けた時代、教育対象が一気に広がった時代である。その時代に外来思想としての儒教が、儒学または漢学として広く教育に取り入れられていった。 ただ、近世日本の儒学は、軍事の論理によって編成された武家社会では、少なくともその成立当初（17 世紀前半）には、多くの藩において学ぶ必要のないものと捉えられていた。このような状況の中で儒学は、支配層である武家社会には各藩に浸透しているとは言い難く、むしろ上層庶民によって自発的に学ばれていた。しかしながら、18 世紀に入る頃になると、武士が、戦時の戦闘者という本来の性格に加えて、平時の官僚という性格をも併せ持つようになり、儒者の登用や儒学による家臣団教化が行われ、儒学を取り巻く状況が大きく変化する。その代表的な例が武家社会における藩校の設立であり、この藩校は現代の中等・高等教育（高等学校や大学）につながっているものが数多く存在する。したがって、藩校は現代の教育の根本の一つと考えることができる。 また、グローバル化の中にある現代日本においても、様々な外来思想が流入している。このような時代に生きる私たちにとって、元々近世日本の人々にとって外来思想であった儒学が日本の中で定着していき、「学問」化していく、その浸透過程を検討することは、外来思想の浸透過程の一つのパターンを解明できるという意味で有意義なことだと考えられる。よって、外来思想である儒学の最初のインパクトがどのように日本社会に浸透し、「学問」化したかを検討する。 さらには、このように諸藩が儒学・儒者を受容することにより、当該諸地域にいか「学問」、そして都市の文化が流入したか、そのことによって当該諸地域にどのような思想的変化がもたらされたかも合わせて考察を行いたい。 また、現在では、近世だけでなく、近代にも研究対象時期を広げており、近世・近代における知識人の社会的役割の総体を明らかにするという、よりスケールの大きい研究への発展を目指す。

学部	連番	氏名	研究テーマ	概要
総合	2	岩崎 祐子	地域金融機関のビジネスモデルに関する研究	地域金融機関を取り巻く経営環境は厳しさを増している。人口の高齢化と少子化が進む地域においては、サービス業の生産性向上などの観点から経営資源の「選択と集中」が求められることになる。本研究では、従来型の経営戦略・収益構造から新しいビジネスモデルを目指す地域金融機関について、現状を整理し今後の課題を考察する。
総合	2	岩崎 祐子	「地域を拓く未来企業」に関する研究	平成30年度に公共政策研究所として三重県の受託調査(「三重のおもてなし経営企業選」受賞企業フォロー(調査・分析等)事業、岡先生、奥原先生、岩崎担当)をまとめることができた。ここでいう三重のおもてなし経営とは、(1)社員の意欲と能力を最大限に引き出し(2)地域・社会との関わりを大切にしながら(3)顧客にとって高付加価値で差別化された製品やサービスを提供している経営のことである。社員、地域、顧客の三者への「おもてなし」を実践することで、過度の価格競争に陥ることなく、地域において事業の継続的発展が期待できる経営のモデルと考えられる。この調査を発展させたかたちで、令和3年度からは特定プロジェクト研究として「地域を拓く未来企業」研究に着手し、企業ヒアリングを実施した。令和6年度も継続して、経営環境の変化に対応した魅力的な地域産業の発掘し、企業の特徴を明らかにする。
総合	3	岡 良浩	地域を拓く未来企業に関する研究	本研究は、昨年度終了した特定プロジェクト研究のテーマと同じ名称である。特定プロジェクト研究では四日市市内企業のアンケート調査を実施したが、引き続き、四日市以外での未来企業の発掘を継続的に行いたい。またアンケート分析も引き続き行い、企業の特徴を考察したい。

学部	連番	氏名	研究テーマ	概要
総合	4	加納 光	「李儼と三上義夫の書簡の研究」プロジェクト ～日中交流史の視点から～	李儼（1892～1963、中国の数学史家）と三上義夫（1875～1950、日本数学史家）は、今日の東アジア数学史を含む「東アジア科学史」の分野において大きな功績を残している。東アジア数学史・科学史の研究に関し、両者は1914年から1937年までの間、45通もの書簡のやり取りしている。李儼が三上に送った書簡は藤井貞雄氏により発見され、現在広島県安芸市教育委員会に保存されている。その書簡の研究を通し、日中間の文化交流史の一面を明らかにしたい。具体的な研究スケジュールは次のとおりである。 1. 書簡の存在を公表する。（済） 2011年9月に「第5回東アジア科学技術古典国際シンポジウム」で吉山青翔氏によって、口頭発表。 2. 書簡の解読 1) 全体的な解読（済） 2) プロジェクト関係者による、詳細な検討。いまだ解読のできない箇所を共同で行う。2021年度に行う予定であったが、新型コロナの感染拡大によって実現できなかった。2022年度も新型コロナの感染状況を見極めながら、対面により行う予定であったが関係者による対面作業が実施できなかった。これをうけ、2023年度に、①未解読部分の解読 ②注釈・翻訳 ③難解個所の注釈作業等を実施した。 3. 2024年度は、全体を通しての原文と翻訳の対照作業を終了させ、今年度中の公表を目指す予定である。 4. 中国側の『科学史資料研究』への投稿 5. 日本語訳・注釈を完成させ、日本側の『数学史研究』への投稿 6. 中国現地（中国科学院自然科学史研究所など）で李儼に関する資料の調査 7. その資料をリストにして日本側で発表する

学部	連番	氏名	研究テーマ	概要
総合	5	川崎 綾子	企業の存続と発展—中小企業とジャスコの緩やかな連帯—	今年度は日本の小売業の事例分析を通して、中小企業の存続と発展の方法を提示する。結論を先取りするならば、中小企業を存続・発展させる方法の1つに大企業によるM&A（合併と買収）がある。中小企業は合併や買収を受容することで、その存続や発展を果たしうる。 具体的には、ジャスコの合併地域法人第1号である「山陽ジャスコ」を主な対象に、中小企業の自治を尊重するM&Aの過程を考察する。事例はイオン関係者への聞き取り情報や同社の公式資料などを基に分析する。 今日のイオンの経営は、子会社の自主性を重んじる「緩やかな連帯」と呼ばれる。この形態は前身のジャスコ時代に端を発するものである。本研究では、この緩やかな連帯が見受けられる「山陽ジャスコ」の事例分析を通して中小企業（子会社）と大企業の関係性のあり方を考察する。
総合	6	倉田 英司	歴史的まちなみ整備における文化財保存と生活環境の両立に関する研究	現在では、全国各地で地域の歴史や文化を活かしたまちづくりが行われており、歴史的まちなみ整備もその一つである。 歴史的まちなみ整備の対象は、建造物を保存するだけでなく、建造物の外観また利用方法、住民らの意識や居住環境など多岐にわたる。したがって、地区内の実情に応じた整備が求められる。 特に、文化財的な目線からの整備内容の検討だけでなく、生活環境等の人々の暮らしとの関係性など、地区ごとに異なる課題について、総合的に判断した上で整備目標を設定することが必要である。各地区の整備目標は、今後も多様化していくものと考えられ、現場での整備内容もさらなる複雑化が予想される。 本研究では、全国の歴史的まちなみ整備の運用事例に関する分析から、文化財保存と生活環境の両立に向けたしくみづくりの検討を行う。
総合	7	小泉 大亮	高齢期における地域型運動グループの育成方法に関する研究	高齢期において健康維持・増進のために身体運動の実践が推奨されている。健康維持・増進を目的とした身体運動は、長期にわたり継続的に実践することや仲間と一緒に実践することが鍵となっている。これまでに地域型運動による介入研究を実施した高齢者グループにおいて、数年にわたり地域型運動が継続されている。そこで、地域型運動を指導している指導者やそのグループに参加している参加者を対象にアンケートや聞き取り調査を実施し、高齢期の地域型運動推進に向けたグループの育成方法について研究する。

学部	連番	氏名	研究テーマ	概要
総合	8	小林 慶太郎	地方自治体におけるセクシュアルマイノリティ政策の導入と展開	日本では、近年、LGBTとしばしば総称されるセクシュアルマイノリティへの対応が政策課題として認識されつつある。 本学が立地する三重県においても2021年3月に「性の多様性を認め合い、誰もが安心して暮らせる三重県づくり条例」が制定され、また、四日市市においても「多様な性のあり方を知って適切に対応するための職員対応要領」の策定が進められている。 しかしながら独自の取り組みを始めた自治体はまだ少数にとどまり、多くの自治体では、手探りの状態であったり、あるいはまったく検討もしていない状態であったりしている。また、トランスジェンダーの権利を認めると女性の安全が脅かされるようになる等のバックラッシュともいえる言説が出回るなど、施策の推進に反対する動きも見られるようになってきた。 そこで、一部の自治体で既に始められている施策の内容や導入過程を明らかにし、今後の全国各地の自治体へのその展開を展望したいと考えている。
総合	8	小林 慶太郎	基礎的自治体におけるミニ・パブリックス導入の課題と可能性	近年、無作為抽出した市民による「ミニ・パブリックス」といわれる手法によって、民意を捉えていこうとする取り組みが、散見される。無作為抽出で参加者が決められることから、代表制民主主義に対して「くじ引き民主主義」などとも呼ばれ、こうした動きは注目されつつある。 しかしながら、こうした取り組みには多くのコストが掛かることもあり、ルーティン化されることはなく単発の社会実験的な取り組みで終わってしまうことが多く、そこで把握された民意が政策にダイレクトに反映されることも少ない。 一方で、愛知県岩倉市のように、ミニ・パブリックスを条例で位置づけ公的な取り組みとして導入していく基礎的自治体も現われ始めた。 そこで、こうした条例によるミニ・パブリックスの導入や、その政策への影響、運営上の課題などを整理し、今後の普及・定着の可能性を展望したいと考えている。

学部	連番	氏名	研究テーマ	概要
総合	8	小林 慶太郎	食による地域振興の可能性と課題	近年、食関連産業による地域振興が注目を浴びている。たとえば三重県では、食関連産業を「本県にとって今後の成長が期待できる分野」と位置づけ、2015年に『みえ食の産業振興ビジョン』を策定し、支援施策を集中的に展開している。 また同県のインターネットサイトによれば、2021年の「観光実態調査」では、「自然や風景を見てまわる」36.9%、「おいしいものを食べる」31.9%が三重県を訪れる上位の目的となっており、三重県の「食」は観光資源として魅力度が高い状態にあるという。さらに食は、食文化という観点からも着目され、地域アイデンティティとも結びつきやすい。 昨年、四日市市において開催されたご当地グルメによるまちおこしの祭典「東海・北陸B-1グランプリin四日市」も、こうした食による地域振興の取組みと言える。 そこで、このように様々な観点から注目される食による地域振興を取り上げ、その可能性と成果及び課題を整理し、その政策としての今後の展開の可能性を検討したい。
総合	9	高田 晴美	岡本かの子の欧州体験とかの子文学への影響	2022年度から継続して、岡本かの子のヨーロッパ滞在、訪問体験がかの子の文学や文学観、芸術観に対してどのような影響を与えたのかの調査を進める。現時点での私見では、見聞を広めるには実際にそれなりの期間暮らしたパリやイギリス、ドイツの影響も受けただろうが、こと芸術観としては、ヨーロッパからの帰りに寄った程度に過ぎないフィレンツェ体験が、かの子の小説家として気概と覚悟と理想郷を形成するのに大きく寄与したと考えている。その分析を深めるために、じっくりと時間をかけてかの子のほぼ全作品を丹念に読み進めていくことを、引き続き行う。
総合	9	高田 晴美	恋愛小説の型の流行と時代状況との関係	女性向けの（広義の）文学作品というと恋愛がテーマとなっているものが王道であるが、近年の女性向け漫画やライトノベルではなぜか、契約結婚・契約おつきあい、お見合い結婚、政略結婚で始まる男女関係を描いているものが異常なまでに多い。百年以上前の日本で〈自由恋愛〉がブームとなり、それを世に問うような小説に描いた時代もあったが、そこから退行するかのような文学現象が現在起きている。今なぜそんな恋愛を物語に求めるのか。時代状況などからめて分析したい。
総合	10	鶴田 利恵	東アジアにおける自由貿易協定や地域連携協定の今後	昨年度に引き続き、東アジアにおける自由貿易協定や地域連携協定の動向とその過程における日本の役割を考察するとともに、ロシアのウクライナ進軍が東アジアのメガFTAに与える影響について分析を行う。

学部	連番	氏名	研究テーマ	概要
総合	11	富田 与	社会現象としての「バンクシー」	これまで、バンクシーの作者性についての論文を発表している。この研究は、その継続で、バンクシー作品の受け入れられ方を中心にし、社会現象としての「バンクシー」を考える。
総合	11	富田 与	「戦争」の正当化と当事者の世界観	ウクライナでの武力行使を正当化する論理をプーチンの持つ世界観から考える。
総合	12	永井 博	竹山道雄におけるアジア太平洋戦争時の捕虜言説の研究	竹山道雄の戦後の作品「ビルマの豎琴」が戦後日本の社会に対して持った意味について明らかにする。
総合	13	中西 紀夫	集団的自衛権についての再考 ～憲法改正は必要か～	本年度の研究テーマは、前年度からの研究の継続である。前年度では、集団的自衛権問題を考えるうえで必要不可欠な非核三原則についても検討を加えたうえで、ウクライナ戦争による日本政府や諸外国の動きなどを視野に入れて考察してきた。本年度からは2023年10月から起きている「イスラム組織ハマスによるイスラエルへの大規模攻撃」も取り上げ研究中である。
総合	14	Felipe Ferrari	西田幾多郎における「絶対矛盾的自己同一」の翻訳	1939年に発表した『絶対矛盾的自己同一』の当初においては、西田幾多郎は次のように「現実の世界」を定義した。 「現実の世界とは物と物との相働く世界でなければならない。現実の形は物と物との相互関係と考えられる、相働くことによって出来た結果と考えられる。」 言い換えると「現実」この世（あるいは世界）に現れている物と物（あるいは「諸現象」）の関係によって造られている。しかし、西田によると、ある物が他の物と関係するときには、物が相手の存在を固定し、同時に自己自身の存在を否定することになる。それゆえ、物の存在と物事の相互関係によって造られている現実そのものが非常に矛盾的存在である。 現在の研究の目的は西田幾多郎における「矛盾」を明らかにしながら、『絶対矛盾的自己同一』の初のポルトガル語翻訳を作成することである。

学部	連番	氏名	研究テーマ	概要
総合	15	二村 建也	個人（家計）の金融リテラシーと金融資産の分散に関する意思決定に関する研究	2017年に個人型確定拠出年金（iDeCo）の加入者範囲が広がり、原則として現役世代はすべて加入できるようになった。また2024年には少額投資非課税制度（NISA）が新しくなり、年間投資枠の拡大や非課税保有期間の無期限化、制度の恒久化が図られた。いずれも、人生100年時代と言われるように現役引退後の長い老後に備えるための資産形成に有効な制度である。これらの制度をより効果的に活用する運用手法のひとつが分散投資であり、運用成果にも大きく影響する。この研究では、個人（家計）の金融リテラシーが、金融資産、具体的には預貯金、株式、投資信託、外貨預金、日本の国債などの分散保有と関係しているのか、関係しているのならどう関係しているのかについて実証分析を行う。実証分析には「くらしの好みと満足度についてのアンケート」などの個票データを用いる。
総合	15	二村 建也	会計や経営に関するリテラシーを測定する設問の開発	経営者が事業を経営していくうえで、会計や経営に関する知識（リテラシー）が必要とされることは少なくない。しかし、必要とされる知識が幅広いこともあり、これまで会計や経営に関する知識を測定する標準的な手法や設問は開発されてない。そこで、金融リテラシーの測定に用いる設問の開発を参考にして、会計・経営に関する、特に基盤的な知識を測定する設問を開発することを考えている。そうした知識の測定が実現できれば、将来的には経営者や起業家を対象にした教育内容・方法の改善や向上に貢献できるかもしれない。設問を開発する研究には、中小企業診断士およびファイナンシャルプランナーとして長く活動してきた自身の経験をいかしたい。

学部	連番	氏名	研究テーマ	概要
総合	16	本部 賢一	コロナ後のオンデマンド型講義のあり方に関する研究	新型コロナウイルス感染症の感染症法上の位置づけが5類感染症に変更となり、多くの講義がオンデマンド（OD）型から対面型へと変更されていく中、私が担当している講義はOD型のまま実施せざるを得なかった。 昨年度、講義を行う中で、Streamではビデオの視聴者数の数値が画面に表示されるので、講義終了時刻にチェックした数値と出欠ボタンのクリック数を比較することで『学生の多くが出欠ボタンを押すだけで、時間内にビデオを見てノートを取るという当たり前の作業を行っていない』というこれまで気付かなかったOD型講義の問題点が判明した。 対面型の授業は時間割通りに行われ、1回限りしか教員の話聞くことはできない。正当な理由から欠席せざるを得なかった学生のみに対して、講義動画を撮影したODビデオを視聴するチャンスを与えることは有意義である。またODビデオは一時中断をしたり、巻き戻して何度も聞き返したりことができるので、聞き逃しなどを防ぐとともに、書くスピードが遅い学生にとってより有効であろう。 こうした点も鑑み、以下のような授業改善を試みることにした。 ①原則として、正規の時間割通りの時間帯にMoodleにアクセスし「出欠ボタン」で出欠をとり、ODビデオを視聴しノートを取ることとする。ODビデオは講義時刻終了と同時に視聴できなくする。 ②ノートを取り切れなかった学生は、教員にメールでその旨を連絡し、再度ODビデオを視聴できるよう申請する。認められた学生のみ、授業当日の夜間に再視聴できるようにする。 ③正当な理由から欠席せざるを得なかった学生は、教員にメールでその旨を連絡し、ODビデオを視聴できるよう申請する。認められた学生のみ、教員と日程を調整した上、視聴できるようにする。 以上のような改善を行うとともに受講者の動向を分析することで、改善策の有効性を検討することが本研究の目的である。

学部	連番	氏名	研究テーマ	概要
総合	17	松本 彩月	多胎育児家庭における社会政策の変遷	日本における多胎育児（双子、三つ子の育児）支援における社会政策は、令和2年度母子保健医療対策推進事業の一環から始まり、年々その補助事業内容は拡充されている。したがって、もはや多胎育児支援における地域福祉的な支援、社会政策は不可欠だと社会に理解されつつあるとも言える。 多胎家庭への支援は、1967年以降当事者を中心とした多胎サークル活動から、その後1990年前後には専門職が関わるような多胎育児教室が始まったとされている。1990年代において支援の社会的意識や価値観は特に当事者にフォーカスされていたが、コロナ禍を経た現代は当事者同士のつながりを超えた、広域的な社会的つながりを重視した支援へと変化している。社会のあり方が変われば人々の行動が変化することからも、まずは多胎育児支援に関する社会政策の変遷をまとめたい。
総合	17	松本 彩月	多胎育児支援策の地域偏差から見る支援探究の現状	福祉政策としての多胎育児支援は未だ地域における偏差が著しい。しかし、1%の確率で起こる出産に対して、日本中同じ支援策を構築することは社会保障制度の観点からも現実的ではない。この点に着目し、多胎育児支援が地域福祉政策として取り入れられている状況を把握した上で、そのエリアに居住する多胎育児家庭の支援探求状況を調査する。対象は三重県内を含めた多胎育児サークル等地域で活動する多胎育児支援団体の協力を得て、現代の多胎育児当事者はどのような福祉政策を求めているのか、なぜそのような政策が必要なのかを明らかにしたい。
総合	17	松本 彩月	多胎育児と公共の福祉（移動について）	ツインベビーカー（以下横並び二人乗りベビーカーを指す）に双子を乗せて外出したところ、公共バスで乗車を拒否された、もしくは乳幼児たちをツインベビーカーに乗せているにも関わらず、畳むよう指示された、といった体験を聞く。また、自家用車においては、多胎育児家庭を含む優先駐車場の利用拡大によって車椅子利用者が利用できない状況も生まれている。これらは、公共の空間だからこそ譲り合いや、思いやりの精神や福祉的な配慮が必要になるが、ツインベビーカーで出かけたという意思を尊重する一方、多胎家庭のみが権利を主張しては公共の福祉に反する。 ツインベビーカーと移動に関する切り口から、公共バスおよびパーキングパーミット制度（配慮の必要な方向けの駐車場の区画を利用する際に、自治体が利用者に利用証を発行する取り組み）について、公共の福祉の考えを元に、多胎育児家庭の移動課題とその展望を探る。

学部	連番	氏名	研究テーマ	概要
総合	18	三田 泰雅	実践する総合政策	名張市商工会議所と協力しての特定プロジェクト研究。名張市の人口減少を考える。
総合	18	三田 泰雅	ポスト産業化時代の産業都市における家族形成	産業都市におけるポスト産業化時代の未婚化とその要因を明らかにするため、質問紙調査を行う。
総合	18	三田 泰雅	第2次30自治体調査	首都圏30自治体の住民を対象に、10年前と同様の設計で質問紙調査を行う。首都圏の親族関係の空間的配置がどのように変化したかを明らかにする。
総合	19	吉川 和挟	政策目的リフレーミングがもたらす「政策目的の複雑化」を統制する方法に関する研究	本研究では「リフレーミング」がもたらす政策目的の複雑化に対処するため、法目的の合理性を裏付ける「立法事実」研究を応用することで、政策実務の場で応用可能なリフレーミング指針を構想する。リフレーミングは、政策目的に関する情報の提示方法を変更することで市民からの支持や受容を引き出しうる政策技術である一方、政策における目的・手段関係を複雑化させ、政策実務の混乱や市民からの予見可能性を低下させるなどの問題を有している。この政策目的の複雑化がもたらしうる問題は、政策担当者の「下位目的の内面化」のような問題から、「本来、規制されるべきでない事業の規制の正当化」などの個人の権利にかかわる問題まで多岐にわたる。これに対し、現在の政策研究は「所与の問題と目的に対する解決策（政策手段）の提供」を目的としているため、そもそも目的そのものの考慮が行えず、リフレーミングの有する問題点への解決策を提供できない。そこで行政法学における立法事実論を応用し、政策目的をリフレーミングする際に「いかなる目的であれば事実に照らして合理性を保てるか」を明らかにする。これにより政策実務に応用可能なリフレーミング方針を提示する。

学部	連番	氏名	研究テーマ	概要
総合	20	Gordon Rees	Using Scripted Monologues to Deepen Understanding in a Film Studies Course	This research looks into how performance-assisted learning (PAL) activities, specifically scripted monologues, can be utilized in a film studies course to deepen student understanding of course content. Students are introduced to different aspects of Japanese history and culture by watching clips from different films. The instructor provides students with handouts and readings related to various topics depicted in the clips and then analyzes the scenes from a cultural perspective. In order to reinforce learning, students will read and perform a scripted monologue from one of the film clips after the class viewing. In this case, students studying about the feudal class social structure of warriors, farmers, artisans, and merchants (shi-nō-kō-shō) during the Warring States era of Japanese history, watch a film clip from a movie set in that time period. In the scene the main character makes a speech which highlights the unequal relationship between farmers and warriors (samurai). By having students perform this monologue it is hoped that it will help deepen understanding of scene content and focus attention on the strict social hierarchy in place in Japan at the time. Students will be surveyed after their performance and the results will be analyzed.
総合	20	Gordon Rees	Introducing Performance-Assisted Learning (PAL) Activities into an EFL Presentation Course	Through this research I hope to introduce performance-assisted learning (PAL) activities into an EFL presentation course and then measure the results and the impact the PAL activities had on students in the course. Scripted skits, original student skits, role-play and a tongue twister contest will be introduced in the pre-presentation phase with the hopes of encouraging students to later on make more dynamic and engaging presentations. Through these activities an attempt will be made to create a collaborative, friendly environment where students aren't afraid to make mistakes. Another aim is to provide students an opportunity to work on basic presentation skills (voice, voice inflection and gestures) and gradually build confidence for speaking English in front of an audience. It is also hoped that these PAL activities will provide them a context for practicing vocabulary and expressions needed for the individual presentations that follow.

学部	連番	氏名	研究テーマ	概要
総合	21	若山 裕晃	アメリカ野球MLB球団におけるメンタルトレーニング指導の実態調査	アスリートの競技力向上を目的としてスポーツ心理学者が競技現場でメンタルトレーニングを指導することが日本のスポーツ界でも浸透し始めている。本年度の研究では、日本で最もポピュラーなスポーツの一つである野球競技におけるスポーツ心理学者の活動状況について、これまでの経緯に踏まえさらに進める考えである。 2016年9月、筆者は、あるメジャーリーグ球団のアリゾナ秋季教育リーグを視察した。そこでは、シーズンを終えたばかりのマイナーリーグの選手やコーチたちが、大小8面ほどのグラウンドやバッティングケージで黙々と練習に励み、日々の練習メニューの中に、技術やフィジカルのトレーニングと同様にメンタルトレーニングのセッションが設けられていた。それ以来、マイナーチームのメンタルトレーニング指導を担当する専属の2名スポーツ心理学者と交流を続け、2018年3月には、スプリングトレーニング時のマイナー選手への講義とエクササイズ形式でのメンタルトレーニング指導を視察し、筆者自身もそのプログラムを体験した。同年12月には、チームビルディングプログラムの手法についてレクチャーを受けた。この球団は、2015年からメジャーとマイナーにメンタルトレーニング指導者を雇用しており、マイナーチーム担当の彼らは、シーズン中傘下のマイナー6チームを巡回して活動している。2023年3月には、5年ぶりにスプリングトレーニングを視察し、彼ら以外にも他球団のスポーツ心理学者たちから情報収集することができた。この訪問によってアメリカでも球団によってスポーツ心理学者の雇用形態やチームでの地位が様々であることが明らかになった。このようなアメリカ野球界におけるメンタルトレーニングに関する情報は、日本の野球界においてほとんど知られていない。本年度の研究では、3月の訪問で交流を持てたスポーツ心理学者たちからの情報収集をリモートインタビューを定期的実施し、昨年レギュラーシーズンの試合がすべて中止とな継続し、直接訪問する機会も設け選手・スタッフに対するメンタルトレーニングの指導内容について調査を実施する。 (参考文献) 若山裕晃(2017) 日米野球界におけるメンタルトレーニング事情に関する予備的調査. 四日市大学総合政策学部論集、第16巻 第2号、57-62. 若山裕晃・渡辺英児(2017). 野球メンタル強化メソッド. 実業之日本社.

学部	連番	氏名	研究テーマ	概要
環境	22	青木 陽子	日本に住む外国人と日本社会	1990年の「出入国管理及び難民認定法」改正以降、四日市市をはじめ東海地域には、「ニューカマー」と呼ばれる南米日系人をはじめとする外国人住民が多数居住することになり、さらに、近年では、「特定技能」の在留資格も新設され、家族の帯同も可能な在留資格のもと、日本は本格的に外国人を「労働者」として受け入れる段階に入ってきている。このように出入国管理制度の改正により、日本で働く外国人の国籍構成や在留実態はますます多様化している中で、国籍制度をはじめとする日本の諸制度がどのような影響を与えているのか、行政の視点、外国人住民の視点、外国人支援組織の視点などから、多角的に問題をとらえ分析を行う。
環境	23	足立 明信	圧電素子收音と空気を媒介したマイク收音の差分のIR(インパルスレスポンス)化、算出方法	弱音楽器の拡声において、しばしば圧電素子を用いた收音が行われる。圧電素子を用いた收音は、收音と拡声が同一空間で行われるケースにおいて、再起的なフィードバックを抑制する目的では有効な收音方法である。ところが一般的に普及する多くの音声コンテンツは、空気を媒質とした音波を振動板で電気信号にしたものであり、圧電素子で收音した音声コンテンツは、不自然に感じられるケースが多い。つまり、音質を犠牲にしてフィードバックの発生しにくい收音方法を選択せざるを得ない場面が存在するという事になる。この問題の解決方法として、圧電素子を用いた收音の音を、マイク收音との差分IRで畳み込む手法が有効かと考えられる。そこで、圧電素子收音と空気を媒介したマイク收音の差分をIR化する手法を確立すべく本研究に取り組むこととした。
環境	23	足立 明信	立体音響技術の活用法の模索	空間オーディオの国際的研究機関のIRCAMが製作したSPAT Revolutionを用いた、SR分野での立体音響の活用法を模索する。音場再現の様なアプローチに加え、WFS(波面合成技術)を用いた定位再現などが考えられる。また、一般的なオーディオリスニングとSR分野では空間の大きさや、スピーカーシステムの出力の大きさに違いがあるため、距離による遅延の問題や複数スピーカーのカップリングパワーアレイやコムフィルタの問題解決にも取り組みたい。

学部	連番	氏名	研究テーマ	概要
環境	23	足立 明信	音の聞こえ方の個人差と音質的のプリファレンスについての調査研究	人は外耳の形状によって、聞こえ方の個人差が生じていると考えられる。その個人差が、音質的な好みに影響を及ぼしているか、また、及ぼしているのであればどのような影響を及ぼしているかを調査する。
環境	24	池田 幹男	魔方陣を解くプログラムとその高速化に関する研究	魔方陣を解くプログラムには既に様々なものが提案されているが、特定の次数のみが解けるものばかりである。本研究では再帰呼び出しを利用することによって、原理的には任意の次数の魔方陣を解くことができ、3次から5次までの魔方陣のすべてを現実的な時間内で解くことが一つでできるプログラムを提案する。また、さらに、魔方陣の一部をテーブル展開して、並列処理することによって高速化を図ることを研究する。
環境	24	池田 幹男	ビット逆順およびデジット逆順を求めるプログラムとその高速化に関する研究	Cooley-Tukey 高速フーリエ変換では、時間間引き型では最初に、周波数間引き型では最後に、2の冪乗点数の場合にはビット逆順の並び替えが必要になり、複雑な基数の組み合わせの場合にはデジット逆順に並び替える必要がある。この並び替えは、応用分野によっては必要がない場合があり、また、全体として計算時間がさほどかからないためにあまり注目されてはこなかった。しかし、今後、非常に大きなサイズのフーリエ変換が必要になる場合には、並び替えも高速化する必要がある。ここでは、部分的な逆順テーブルを用いることによって、並列処理を可能として、逆順を高速化する。ここで、特にビット逆順の場合には、並列度に応じた部分固定逆順テーブルを使用する方法を提案する。
環境	25	大八木 麻希	北勢中央公園内の池及びマンボ内の流下に伴う水質変化	四日市市内の山間に位置する県営北勢中央公園には市場上池と下池というため池があり、その池の水は農業用水路であるマンボにつながっている。これまで、両池の水質に関する調査の記録はなく、この地域の伝統文化遺産であるマンボの水質についても、研究事例はない。さらにこのマンボ内には本学の卒業研究(野呂研究室)により、洞穴性コウモリが生息していることが明らかとなっている。コウモリ類が生息するマンボでは、コウモリの排泄物が一面に堆積している場所もあり、生物の集水域の地下水の水質に影響を与えるとともに、配水域の農業用水の品質にも影響を与える可能性がある。農業用水として利用されていることから、水質測定項目は窒素・リンについて行う。コウモリの糞による影響についても推定を行う。

学部	連番	氏名	研究テーマ	概要
環境	26	片山 清和	A I を用いたエコーロケーション音によるコウモリの種類判定	コウモリは夜間に飛行に飛行しているが、これは超音波を用いてソナリングを行うことで可能となっている。コウモリのモニタリングは、これまで捕獲して種を特定することで行われてきたが、捕獲できていないコウモリも多数おり、完全にはモニタリングができていない。 そこで、コウモリがソナリングに使用してる超音波を観測し、その超音波の特徴から種の判定をAIを用いて行うことを研究する。
環境	27	鬼頭 浩文	災害支援体制の持続と、地域防災に中高大生が貢献する仕組みの地域社会への実装	・三重県と連携して2022年度に立ち上げた、三重の防災に学生が貢献する仕組みを継続 ・四日市市と連携して、学生が支援物資ロジスティクスに貢献する仕組みを構築する ・四日市市消防本部と連携して構築した避難所運営に学生が貢献する仕組みをブラッシュアップ ・社協と連携して設置した学生が災害ボランティアセンター運営に貢献する仕組みをブラッシュアップ ・能登半島地震の被災地における災害支援や被災者の生活、復興への取り組みに関する調査・研究 以上の研究を通して、県市町の地域防災計画、四日市市内各地域の地区防災計画、四日市大学事業継続計画に成果を反映させ、実効性を確保するための訓練を実現していきたい。
環境	28	黒田 淳哉	コンピュータビジョンを用いた光環境評価方法の確立を目指して	夜の光環境評価は複雑である。例えば、夜空が光害の影響で明るい状態にある場所でも、その地上では足元が見えないほど暗い環境が存在する。一方で、地上では明るく感じるが、夜空は暗く、星が良く見えるような矛盾した環境もある。これらは、光環境の評価に複数の視点が必要であることを示唆しており、単純に地域の光環境を「良い」や「悪い」と一括りにすることはできない。評価の視点が多いほど得られる情報量も増え、その結果、より効果的な解決策を発見することに繋がる。そこで本研究では、光環境の評価における新たな視点づくりの検討を行う。人間がどう感じているか、人間の感覚にフォーカスした評価方法の確立を目指す。具体的には、コンピュータビジョンの技術を活用し、画像解析から夜間の光環境を定量的に測定を行う。

学部	連番	氏名	研究テーマ	概要
環境	29	田中 伊知郎	樹上生活していた人類祖先の行動の解明	樹上生活していた人類祖先と共通する霊長類を対象に行動分析を終え、使用したイタリア製ソフトウェアについて、東京の代理店を経て、掲載許可を得て、さらに、専門家のコメントを得て、改稿し、海外の英文学術誌に投稿査読中である。
環境	30	千葉 賢	鈴鹿山系朝明川源流部のブナ林のオゾン濃度調査	ブナは冷温帯林の代表樹種で、日本海側などの冷涼な気候帯に自生する。豊かな生態系を育む他、水源涵養、斜面安定などの機能を持つ。そのブナ林が鈴鹿山系朝明川源流部伊勢谷の標高730m以上の北西斜面に存在するが、地球温暖化の影響で衰退が危惧されている。そこで約10年前に毎木調査を実施し、3,000本を超える個体のデータベースを作成した。昨年度より調査を再開し、学生とともに植生調査（競合樹種調査）、枯死率調査、オゾン濃度調査などを行った。丹沢山塊のブナの枯死の原因として、オゾンが疑われている。オゾンは光合成回路を損傷し、葉の成長を阻害すると考えられている。令和6年度はオゾン濃度調査を継続し、年間変動を明らかにするとともに、ブナへの影響を表す指標であるAOT40を求めて、定量的な評価を行う。
環境	30	千葉 賢	伊勢湾の海洋ゴミの研究	伊勢湾の海岸、海面、海底、魚介類の体内に存在するマイクロプラスチック（以降はMP）の調査を昨年度まで進めて来た。また、伊勢湾の最北部にあり、渡り鳥の中継地としても有名な藤前干潟の泥中に大量のMPが含まれていることを発見した。令和6年度は、この結果を受けて、藤前干潟周辺のベントスと魚介類に含まれるMPの調査分析を学生とともに行う。具体的にはアナジャコ（濾過食者）、ニホンスナモグリ（堆積物食者）、シオフキなどの2枚貝類（濾過食者）、ベンケイガニなどのカニ類（堆積物食者）、ハゼなどの底生魚類（ベントス食者）を採取して、体内のMPの含有率などを調査する。また、企業と協力して、水田から流出する徐放性肥料プラスチックの回収装置の開発・実験を行う。

学部	連番	氏名	研究テーマ	概要
環境	30	千葉 賢	貧酸素水塊発生現象を含む伊勢湾の水質の研究	1979年から水質総量規制が行われてきたが、伊勢湾の表層のCOD（有機物）は増加を続け、底層の貧酸素水塊の発生は長期化し、酸素濃度も低下傾向にある。近年は水質総量規制により栄養塩が不足したために黒ノリが色落ちし、アサリが不漁になったと騒がれるようになった。従来、CODの増加と貧酸素水塊の発生は富栄養環境下で起きるものだと考えられてきた。この一見矛盾する現象について、相互に関連した一体の問題との仮説を立てて、三重県と共同で研究を進めてきた。伊勢湾の低次生態系の状態を把握することが重要と考え、動植物プランクトンの調査を行って来たが、植物プランクトンの著しい小型化や、カイアシ類を中心とした動物プランクトンの現存量の著しい低下などが起きていることを見出した。細菌と動物プランクトン間の食物連鎖を考慮した生態系モデルを開発し、植物プランクトンの小型化が起きる条件や、動物プランクトンの現存量の低下が生態系や水質に及ぼす影響などを検討した。令和6年度は、引き続き、動物プランクトンの採取調査を行うとともに、生態系モデルによる解析を進め、伊勢湾の水質と生態系で起きている現象の解明を目指すとともに、改善策の検討を行う。
環境	31	野呂 達哉	農業用地下水路をめぐらとするコウモリ類の検出と環境評価	農業用の地下水路である「マンボ」ならびに愛知用水の暗渠をめぐらとするコウモリ類について、音声と環境DNAによる検出を行い、生息種の多様性から地域環境の評価を行う。
環境	31	野呂 達哉	都市域におけるアカギツネの分布の変遷-名古屋市を事例として-	名古屋市内におけるアカギツネ確認地点の20年間の記録から、アカギツネの分布の変遷を明らかにし、都市順化の状況とGISを用いてその要因について明らかにする。
環境	31	野呂 達哉	都市域における外来中型哺乳類の分布とその要因	緑地と市街地が隣接する名古屋市内の都市域において、外来種の防除事業等で捕獲された外来の中型哺乳類（アライグマ、ハクビシン、シベリアイタチ）の捕獲地点の記録から、各種類の分布地域を比較するとともに、GISを用いてそれらの環境要因を明らかにする。

学部	連番	氏名	研究テーマ	概要
環境	32	樋口 晶子	初級英語学習者を対象としたコミュニケーション・ライティング指導における誘導的パラグラフ・ライティング指導の効果の検証	まとまった量の文を書くという作業はきわめて難しい。外国語で書く場合、当該外国語を読む力と母語の書く技能に大きく依存し、母語で書く技能に最も強い影響を与えるのは思考であると言われる。英語で書く練習は学習者の思考力を高めることが可能であるが、初級者にとって英語でパラグラフを書くことは容易ではない。ライティングに関する研究も中～上級レベルの学習者を対象にしたものが多く、初級レベルの学習者を対象とした研究は多くない。 2022年から継続しているQ&A形式を利用した制限作文による誘導的パラグラフ・ライティング指導の効果を検証する。授業前後のアンケート及び学習者の書いたパラグラフを比較し、学習者の意識の変化とライティング力の変化について検証する。指導はコミュニケーション・アプローチに基づき、読み手を意識して内容に重点を置く。
環境	32	樋口 晶子	ナサニエル・ホーソーンにおける「許されざる罪」	ナサニエル・ホーソーン(Nathaniel Hawthorne)が、生涯のテーマとした人間の「許されざる罪」については、『緋文字』、「イーサン・ブランド」など、長編・短編にかかわらず多くの作品で取り上げられ、作家の出自など多様な視点からの多くの研究によっても、作家の深い洞察が完全に解き明かされたとは言い難い。ホーソーンの初期の短編作品である「私の親戚、モリヌー少佐("My Kinsman, Major Molineux")」と、発表された最後の短編である「フェザートップ("Feathertop")」の比較から、「許されざる罪」の解釈を試みる。
環境	33	廣住 豊一	竹林間伐材由来の資材を連用した農耕地における土壌物理化学性の経年変化(継続)	四日市地域は豊富な竹林資源に恵まれている。しかしその一方で管理を放棄された竹林が問題になっている。そこで放棄竹林対策の一環として、竹林間伐材を肥料化し、有用な資源として活用することを目指す取り組みが行われている。 本研究課題では竹粉の利用促進をはかるため、農地に対する竹粉施与による「土づくり」効果について現地調査によって調べる。令和6年度も引き続き、三重県四日市市堂ヶ山町にある竹粉施与試験田において、田植え前(4月)および稲刈り後(9月)に土壌調査を実施する。そして、竹林間伐材から製造された粉末肥料を連用することによる農耕地土壌の物理化学性の経年的な変化について調べる。

学部	連番	氏名	研究テーマ	概要
環境	33	廣住 豊一	小型試験田を用いた緩効性肥料被覆樹脂の流出量調査（継続）	水田に散布された緩効性肥料の被覆樹脂の流出が問題となっている。しかし、その実態は明らかになっていない。本研究課題では実験ほ場に小型の試験田を造成し、ここで緩効性肥料を用いた水稲作を行うことで、水田からの被覆樹脂の流出状況について、実験的に調べている。本年度は、昨年度造成した小型試験田において水稲作を継続し、被覆樹脂流出の経年的な変化を調べる。
環境	33	廣住 豊一	地温冷却がトルコギキョウの生育と切り花品質に与える影響	トルコギキョウは花色・花形が豊富で、フラワーアレンジメントやブライダルなど幅広いジャンルで使用され、生花店でも大部分の店舗で取り扱いが見られるわが国の主要な花きである。トルコギキョウは、キク、バラ、ユリ、カーネーションなどと並んで花き市場において重要な地位を占める。 トルコギキョウは、温度によって生育や切り花品質が影響を受けることが知られている。なかでも、高温による色流れは品質や出荷価格を大きく低下させるため、この対策は極めて重要である。令和6年度は、試作した根域冷却装置を改良し、地温を局所冷却することによる切り花品質の改善効果について調べる。
環境	33	廣住 豊一	ため池しゅんせつ土の水田用土としての活用法	ため池をしゅんせつした際に発生する残土の適正処理が課題となっている。そこで本研究ではため池しゅんせつ残土を水田用土として活用する方法について検討する。ため池からしゅんせつした残土を充填したポットで水稲作を実施し、水稲の生育状況・収穫量、残土中の成分変化、表層水・間隙水の水質変化について調査する。

学部	連番	氏名	研究テーマ	概要
環境	34	古山 歩	ハクジラ類胃内容物分析のための深層学習による胃内未消化物同定モデルの開発	食性は鯨類の保護において非常に重要な生態情報の一つである。胃内に残留している未消化物から餌生物の分類群を同定する胃内容物分析は、最も一般的な食性解析手法の一つである。胃内容物分析は”何を”，”どれくらい”食べていたかを示すことができるが、その一方で、1頭の鯨類の胃内容物はその個体の短期的な摂餌しか示さないため、種としての食性の評価には多くの個体の胃内容物情報が必要となる。日本周辺海域においては、一部の捕鯨対象種を除き、原則として多くの鯨類は能動的な捕殺を行うことができないため、胃内容物分析のための標本は主に漂着や混獲による死亡個体から収集されている。しかし、鯨類の漂着や混獲はいつどこで起きるかわからないため、必ずしも専門的技術をもった研究者がその場に立ち会えるとは限らず、漂着・混獲鯨類を水族館飼育員や博物館学芸員が調査することも少なくない。漂着・混獲鯨類の調査に関してはすでに対応マニュアルが存在し、研究者でなくとも適切な調査や生物標本の採取を行うことが可能であるが、その後に採取した胃内容物を適切に分析するためには、専門的な知識や経験、技術が不可欠である。そのため、地域によっては、胃内容物を収集しても、分析が行えず、データが蓄積されづらいといった状況がある。この状況を打開し、鯨類の胃内容物情報を収集、蓄積するためには、誰でも簡単に専門の研究者と同等の精度で胃内容物分析を行える環境を整える必要がある。 以上のことから、本研究では、深層学習を用いて日本周辺の沿岸性ハクジラ類を主な対象として胃内容物同定プログラムの開発を目指す。胃内容物分析において同定形質として用いられる魚類耳石や頭足類下顎板などの画像を学習させ、それらを機械的に同定することができるようになれば、誰でも簡便に、かつ一定の正確性を担保した状態で胃内容物分析を実施することが可能になり、日本周辺のハクジラ類の食性研究のさらなる発展に貢献できると期待される。

学部	連番	氏名	研究テーマ	概要
環境	35	前川 督雄	情報環境構造解析法の開発研究	環境から感覚系で受容する環境の情動的側面（以下、情報環境と呼ぶ）のもつ情報構造を解析し、評価する手法を開発する。 情報構造のうち、その時間的空間的密度、複雑性、変容性に注目し、フラクタル次元局所指数を指標とした解析手法の開発を進めている。これまでハイパーソニック・エフェクトを導くハイパーソニック・サウンドのもつ自己相関秩序を見出した。また、テクスチャーの視覚情報構造について、縄文土器テキスチャーと弥生土器テクスチャーとの間に、フラクタル次元局指数の値や推移における違いを見出すことができた。 今年度は、時系列情報構造への展開を試行を継続する。
環境	35	前川 督雄	人工生態系の進化シミュレーション	有限不均質な環境条件をもつ人工生態系シミュレーターSIVAを用いて、地球生態系の成熟と地球生命の進化・多様化をシミュレーションする。
環境	36	牧田 直子	湖沼に生息するプランクトンの調査研究	ダム湖については、2021年から調査を進めているプランクトンおよび付着藻類の分類と計数を継続し、プランクトン組成の経年変化を明らかにする。また、2022年に再検討したプランクトン型を適用させ、ダム湖に生息するプランクトンの生産性について評価を行う。
環境	36	牧田 直子	水田に生息する微小珪藻類の分類	珪藻類の大きさは多種多様であり、小さい珪藻類ほど分類が難しくなる。湖沼と比べ、水田に生息する珪藻類は微小なものが多く、種名まで詳細に記載された報告例は多くない。本研究では、これまでの水田調査で得られた試料を用い、水田で高頻度に出現する微小珪藻類の種類を明らかにする。

学部	連番	氏名	研究テーマ	概要
環境	37	柳澤 翔士	特殊形状スクリーン及びサラウンドサウンドシステムによるVR体験システムの構築	平面スクリーンや、各種平面ディスプレイによるVRコンテンツの視聴は、深い没入感を与える事が少ない。この場合ヘッドマウントディスプレイや、VRゴーグルを使った映像の視聴が効果的ではあるが、これらのデバイスは、装着者のみに深い没入感が発生するのであって、複数人でのVR体験は難しい現状がある。 本研究は、半球形状のスクリーンとサラウンドスピーカーシステムを使用したVR体験装置を製作し、特殊なデバイスを装着せずとも複数人でのVR体験が可能なVRシステムの構築を目指すものである。
環境	38	柳瀬 元志	Z世代を対象とした過去のテレビ番組を用いての視聴研究	若者の「テレビ離れ」が叫ばれて久しい。総務省の調査によると、13歳から19歳の視聴時間は2000年から2015年の15年間でおよそ3分の1近くまでに減少している。最も大きな要因は、インターネットの普及である事は間違いないが、テレビ番組の”質““自体はどうだろう。横浜にある公益財団法人 放送ライブラリーは、放送法に基づく日本唯一の放送番組専用アーカイブ施設で、過去のテレビ・ラジオ・CMなどおよそ3万本を無料公開しており、さらにこの貴重な資料を、教材・視聴覚資料としてオンラインで活用することができる。このシステムを利用し、テレビが元気だった時代に作られた作品を、Z世代と言われるテレビ離れが著しい年代の学生に見せたら、どんな反応を示すのか。また彼らをテレビ視聴に引き戻すヒントになることがあるのではないか。娯楽の主役がテレビからインターネットに移った今、過去の秀作と現在をつないでテレビのこれからを探る。昨年と同様のテーマではあるが、引き続き研究を進めていきたい。